

## 映画『きこえなかったあの日』 東日本大震災 10 年の記録

今村 彩子（映画監督）



## 1. はじめに

映画『きこえなかったあの日』（令和3年度文化庁映画賞・文化記録映画優秀賞）は、東日本大震災で被災した聴覚障害者たちの10年の歩みを描いた記録映画です。わたし自身、生まれつき耳がきこえないため<sup>※1</sup>、“聴覚障害者の被災の現実”を、より多くの人に伝えていきたいとの思いから、東北の地に何度も足を運びました。

この原稿の依頼を受けて、2011年、まだ震災の傷跡が多く残る宮城県で出会った人たちのことを思い起こしました。執筆作業は内面へ内面へと進んでいき、自分の10年を振り返ることにもなりました。

生まれも育ちも、今の住まいも愛知県名古屋市であるわたしに、当初、東北の友人はいませんでした。それでも、10年経った今なお東北と関係が続いているのは、発災直後に宮城県で知り合った方々から刺激を受け続けてきたからです。映画監督としてではなく、今村彩子という人間として。

本来であれば、当学会誌の論考は、「だ、である」と、断定調で記述することがきまりとなっているのですが、わたしの思いや変化を中心にしてこの10年の時の流れを素描するために、以下、「です、ます」調で記述することをご容赦ください。

## 2. 未曾有の災害

東日本大震災が起きた時、わたしは愛知県内で仕事の打ち合わせをしていました。揺れを感じ、テレビをつけると画面に映し出されたのは、海。「地震なのに、なぜ海？」…。その晩、帰宅してテレビをつけた途端、津波の映像が目に飛び込んできました。「そうか、あれは津波が来る前の海だったんだ」。字幕がついてい

なかったので、耳がきこえないわたしは、何が起きていたのか、さっぱりわからなかったのです。

「東北の耳のきこえない人たちはどんなことに困っているのだろうか？ どのような支援を求めているのだろうか？」。テレビや新聞ではほとんど報じられないことを当事者として取材し伝えることで、役に立てたらという思いに駆られました。

当時、わたしはCS放送「目で聴くテレビ」のディレクターをしていました。1995年の阪神・淡路大震災では、多くの耳のきこえない人が情報を得られずに困りました。その反省をふまえて、手話と字幕で伝える「目で聴くテレビ」が98年から始まったのです。

東日本大震災の11日後、「目で聴くテレビ」のスタッフと共に宮城県と福島県、岩手県を訪れました。でも、相手にとってわたしは、遠い場所から来た見知らぬ他人。取材を受け入れてもらえないかもしれないと心細くなりながらも、ひとまず宮城県聴覚障害者協会に向かったのです。その時に迎えてくれたのが、会長の小泉正壽さん。「遠いところからお疲れさま」。笑顔でねぎらい、避難所に身を寄せているろう者の情報を教えてくれました。それが菊地信子さん、藤吉さんご夫婦でした（写真1）。わたしも耳がきこえないと知ると、信子さんは、一気に手話で困っていることを話してくれました。「きこえる人の話が分からない」、「熱もあってストレスがたまっている」。時折、咳込みながら話す姿に、胸が痛くなりました。手話が通じない環境におかれた孤独や情報を得られない不安は、どんなものなのか…。自宅が流された場所も案内してもらいました。当時の様子を思い出し、涙をこぼす信子さんにわたしは心で謝りながら、カメラを回し続けました。「ごめんね、ごめんね。信子さんが安心して

暮らせる日が来るまで、何度でも会いにくるからね。

その後、現在に至るまで、毎年1、2回、多い時は、3～4回と宮城県に足を運んでいます。



写真1 大切な出会い(菊地さん夫婦)

### 3. 映画制作と上映活動

撮影で宮城を訪れては、それを「架け橋」シリーズ<sup>注2)</sup>として20～30分の映像にまとめ、上映会を開きました。その度、義援金を募り、宮城に送りました。

2012年には、菊地信子さんを主人公としたDVD『音のない3.11』と、宮城県聴覚支援学校の遠藤良博先生(ろう者)と生徒の体験談をまとめたDVD『手話で語る3.11』を制作しました。

2013年になると、東京の劇場から「架け橋」シリーズを上映したいと声をかけられました。ただ、「架け橋」シリーズは、現地に行ってカメラを回し、名古屋に帰ってから直ぐに編集した作品のため、わたしの個人的な感情が強く入っています。津波警報が聞こえないために亡くなった、耳が聞こえない人たち。命と安全を守る避難所でさえアナウンスがわからず、情報から取り残された人たち。この状況に対する怒りや無念の想いが、作品の中に強く織り込まれていました。想いが一方的で、観客によっては“押しつけ”と思われるかもしれない。そう感じたわたしは、再編集し、映画『架け橋 きこえなかった3.11』を完成させました。

そして、わたしの宮城県での撮影・映像制作の様子 がテレビや新聞で紹介されたこともあり、映画が公開されると、全国各地からも上映の依頼が舞い込みまし

た。宮城県での撮影や編集、講演と多忙になり、毎週末は上映でスケジュールがぎっしり。コミュニケーションが苦手なわたしにとっては、上映後の観客との交流が負担となり、精神的にも肉体的にも限界に達してしまいました。それでも、「わたしが見聞きしたことをひとりでも多くの人に届けたい」という一心で、目の前にあることを懸命にこなす毎日でした。

そんな上映会での質疑応答で、毎回聞かれることがあります。「きこえない人はどんなことに困っているのでしょうか?」。最初は関心をもってもらえたことが嬉しく、津波警報や避難所でのアナウンスはきこえない人には届かないこと、目で見えてわかる情報が必要であることを伝えました。しかし、毎回、同じことを聞かれると、次第に疑問が湧いてきます。「きこえない人はいつも困っているわけではない。きこえる人でも困っている時がある」、「きこえる人にできないこともある。いやきこえないからこそ、できることだってあるはず」。

このように考えるようになったのは、「あなたがコミュニケーションが苦手なのは『耳が聞こえないから』ではない。ただコミュニケーションが下手だからだ」と指摘してくれた友人のお蔭です。その友人は、わたしを「きこえない人」である前に「ひとりの人間」として接してくれました。最初はその厳しさに反発していたのですが、根底には真の優しさがあることに気づきました。

コミュニケーションが苦手なことを、「そうだね、耳が聞こえないからだね」と肯定されても、わたしは自分の力ではどうすることもできません。きこえるようにならないわけですから。でも、「コミュニケーションが下手」という理由であれば、どうしたら上手になるかを考えることができます。自分の努力次第で上達するかもしれない。こちらの方が可能性を感じます。

話を「きこえないからこそ、できること」に戻します。がれきの撤去など、騒音の中での作業はきこえる人にとってはストレスとなりますが、きこえない人にとっては関係ありません。また、声の届かない海中で

の検索では、手話を使う人の方が有利です。手話で指示を出したり、報告を受けたりしながら探すことができます。このように「きこえないから困ること」のセットとして「きこえないからできること」も話していないと、「きこえない人は助けてもらう立場」というメッセージを無意識に送り続けてしまうことになる。そう気づいたのです。

このように、人と人之間にある「壁」は、障害のない人が一方的に作り出しているとは限らず、当事者自身が作っている部分もあります。

#### 4. ろう者による災害ボランティア

2018年7月、西日本豪雨が起きた時は、被害を受けたろう者の話を伺うために、広島県ろうあ連盟に連絡を取りました。3組の家族が被災していて、「災害から1ヶ月経った今は落ち着いている」という回答でした。また、広島県ろうあ連盟は、「7月に災害ボランティアセンターを立ち上げ、きこえない志願者を集めて現場に派遣している」と話してくれました。

「ろう者のためのボランティアセンター?」。いつも助けてもらうばかりの対象だった「きこえない人」と「ボランティア」の2つの言葉が、わたしにはすぐには結び付きませんでした。

ろう・難聴者が個人でボランティア活動をする話がありますが、きこえない人に特化したボランティアセンターは全国初の試みです。手話のできるきこえる人も募集し、現場に送り出しているといいます。「ぜひ、その様子をカメラに収めたい!」。わたしが担当しているYahooニュースの動画で紹介することにしました<sup>注3)</sup>。

テレビニュースが連日のように熱中症の危険を呼びかけている中、広島県安芸郡坂町に駆けつけると、汗を流しながら黙々と泥をすくう20代から50代のボランティアがいました。「自分たちも人の力になれる」、「困っている人を助きたい」、そうした喜びや熱意を抱いて作業している姿に、わたしは衝撃を受けました。その理由をたぐりよせてみると、「耳のきこえない人

は助けてもらう立場」という固定観念が、心のどこかにあったことに気づきました。「きこえない人である前に、ひとりの人間として考え、行動したい」と思っていた自分に、まだそんな刷り込みがあったなんて。恐怖に近いものを感じました。

こういう考えは、日常生活で人からかけられる言葉、障害者を取り上げるテレビ番組や新聞記事などから発せられるメッセージが幾層にも重なって、知らないうちに自分の身体に染み込んでいるのです。

「きこえないのに頑張っていて偉いね」という類の言葉は、良いことを言っているように見えて、「きこえないからできない」というステレオタイプな考えが根底にあります。このような悪意のない言動が、当事者に「障害者はやできない」、「助けてもらう立場」という思い込みを植え付けてしまうのです。「手話はみつともない」というような、今は少なくなった「見える差別」よりもやっかいです。障害者側にも責任がないとは言えません。「きこえない自分にボランティアはムリ」、「きこえる人の足を引っ張ってしまう」と諦めたり、遠慮してしまったりする人は少なくありません。きこえる人も「きこえないボランティア」の存在は想像しづらいでしょう。「この刷り込みを取り除きたい」という想いでカメラを回し、6分に編集した動画をYahooニュースで配信しました。



写真2 西日本豪雨時のボランティアのみなさん



## 5. 『きこえなかったあの日』の制作

近年、台風や集中豪雨による水害が増えています。だからなのか、東日本大震災から5年、6年と時間が過ぎても、『架け橋 きこえなかった3.11』の上映依頼が途絶えることはありませんでした。自主上映のトークゲストとして招かれる場合もあります。でも、月日が経つにつれ、映画の内容が現在から遠さがっていきます。それなら、出演者の近況も伝えたいと考え、他の作品を制作している間も、時間を作っては宮城県を訪れ、カメラを回しました。それを5分ほどの動画にまとめ、『架け橋』の上映後に流しました。

2019年秋には、「2021年3月11日に『架け橋』を上映し、今の宮城県の様子を伝えてほしい」と打診を受けました。東日本大震災から10年という大きな節目を迎える日の上映企画だといいます。「それなら、これまで撮ってきたものも入れて、新たな作品として観てもらいたい。2016年に『目で聴くテレビ』のディレクターとしてカメラを回した熊本地震や、Yahooニュースで配信した災害ろうボランティア活動も映画に入れよう。コロナ禍のろう者の状況も紹介して、東日本大震災から10年の記録を映画にしよう」。そう決意し、編集にとりかかりました。

## 6. 加藤さんとの出会い

映画の主人公となる加藤襲男（えなお）さんとの出会いは、2011年8月、3回目の撮影の時のこと。それは、夏の暑い日でした。宮城県亘理町にある仮設住宅で、加藤さんに救援物資を届けにきた小泉さんが「撮影があるけど…」と伝えると、「いいよ」と快諾してくれました（写真3）。

小泉さんに扇風機の使い方を身振り手振りで教わっている加藤さんは、文字の読み書きも筆談も難しいようです。それでは他の住民とのコミュニケーションは難しいのではないかと心配になりました。

そう思いながら仮設住宅の集会所へ行った時のことです。町役場から派遣されている職員が「いつも会っていると、だんだんわかってくるんだね」と話して



写真3 小泉正壽さん(左)と加藤襲男さん(右)

くれました。ちょっかいを出して笑う加藤さんに、「もうー」と苦笑する職員。ふたりの間には温かいものが通っているように感じました。

その様子を見て、声や手話や筆談以外にも、人と繋がる方法はあるのだと気づかされました。そして、「相手とのやりとりは音声や文字、手話でなされるもの」と狭い視野でコミュニケーションを捉えていた自分が恥ずかしくなりました。同時に、どうしたらきこえる人とそんなに屈託なく笑い合えるのだろうと羨ましくもなりました。

というのは、わたしが「きこえる人で構成されている社会で生きる窮屈さ」を感じていたからです。わたしの初期の映画制作の原動力は「怒り」でした。テレビも映画も字幕がないため見られない。学校や病院でも手話が通じず、コミュニケーションがスムーズにいかない。そんな不便な生活を強いている社会に対しての「怒り」が制作のエネルギーとなっていたのです。また、わたしと同じように不満を抱いている、きこえない人に対しても「怒り」や「窮屈さ」を感じました。彼らといると自分のイヤな部分を見せられているようで、自己嫌悪に陥り、次第に、ろうの世界からも距離を置くようになってしまいました。そんな中で出会った加藤さんからは、「窮屈さ」を全く感じません。伸びやかに住民とふれあう加藤さんは、心からその時間を楽しんでいるようです。「わたしも加藤さんみたいに、きこえる人と分け隔てなく接することができたら」…。宮城県に行くたびに加藤さんのいる仮設住宅を訪れ、そこから人間関係のコツを見つけ出そうとし

ていました。

一方で、もどかしさも常に感じていました。加藤さんの独特な手話が、わたしにはわからないのです。わかるのは数字だけ。ただ、それは加藤さん個人の問題ではありません。手話が禁じられていた時代があり、ろう学校でさえ手話を学ぶ機会を奪われていたのです<sup>注4)</sup>。

「加藤さんのことをもっと知りたい。でも、会話が成り立たない」。加藤さんをよく知る岡崎さんが通訳してくれましたが、それでも質問に対する応えが返ってくることは少なく、まったく別の話になったりすることも度々でした。そのうち、わたしは加藤さんの話を「わかって」という努力を手放してしまうようになりました。今思えば、「(観客にとって) わかりやすい物語」や「説明」を自分自身が求めていたのだと思います。加藤さんが墓石の話をしてくれても、「震災とは関係ないから」と興味を持とうとしませんでした。

「それが加藤さんの仕事だったんだ」とわかったのは、ずいぶん後になってのことでした。

今振り返ると、わたしは加藤さんや信子さんたちを自分と同じ「きこえない先輩」として慕うのと同時に、「被災したろう者」として見ていました。そのことを気づかせてくれたのは、映画『きこえなかったあの日』と一緒に編集した岡本和樹さんです。「震災がその人の人生すべてではない」。彼の言葉に、頭をガンと殴られたような衝撃を受けました。

加藤さんと深い関係を築けなかったのは、わたしが加藤さんの人生に興味をもつ意識が弱かったから。

「被災したろう者の声を伝えなければならない」という思いがコミュニケーションの本質を見えなくしていたのです。インタビューやナレーションで映像を繋いで編集しているわたしに、岡本さんは「今村監督は生きた人間より情報を大切にしている」と言いました。

わたしは加藤さんや信子さんたちの何を見てきたのだろうか。「震災5年目の今、どんな気持ちですか?」と聞いては相手を困らせるだけでした。自分だってその質問を向けられたら、応えようがないのに…。

「本当に聞きたいこと」ではなく、「表面的な言葉」を求めていた自分が心底情けなくなりました。

そして、「これは震災と関係ないから不要」と切り捨ててきた映像を見直していくと、画面越しで出演者に語りかけたくなるほど、見入ってしまいました。畑の話をする信子さんを、ニコニコと見つめている夫の藤吉さん。台所でタコを器用に切る加藤さん。「こういう一人ひとりの営んできた生活が、その時間が大切なんだ」。加藤さんや信子さんの暮らしぶりがわかる場面を編集で繋げていきました。こうして、言葉による説明ばかりだった作品が、映像で出演者の人となり伝える映画に生まれ変わりました。

## 7. あの日から10年

東日本大震災から10年、ろう者・手話を取り巻く環境もずいぶん変わりました。2013年、鳥取県が全国に先駆けて手話言語条例を制定<sup>注5)</sup>。それを皮切りに、全国で条例を制定する自治体が増えています。コロナ禍のテレビ画面では、手話通訳をつけて会見する知事を見かけるようにもなりました。東京オリンピックの閉会式で生中継の手話通訳が付いたのには驚きました。

わたし自身も、きこえない人や手話に対する理解が進んでいることを実感する日々です。10年前だったら、お店で店員さんに声をかけられた時、耳がきこえないことを伝えると、相手はいつも戸惑っていました。その気まずい沈黙に耐えられず、わかったふりをしてやりすごすことが度々ありました。しかし、ここ数年、わたしがきこえないと身振りで示すと、「袋、入りますか?」、「カードはありますか」と身振りで応じてくれるようになりました。

またこの10年で、わたし個人としての変化もあります。耳のきこえないLGBTや発達障害の友人と出会い、それがきっかけとなりドキュメンタリー<sup>注6)</sup>を制作。「LGBTの前では、異性愛者の自分は多数派側にいる」と知った時は困惑しました。わたしは生まれてからずっと「少数派」だと信じ、その立場で映画を制作

し、発表してきたからです。「相手や環境によって自分は多数派にもなる」。このことはわたしを根底から揺るがせました。発達障害の友人から、「あやちゃん是一般の脳ミソ」と言われた時は、申し訳ないような気持ちになりました。「きこえないことを同情されたくない」と思っていた自分にも、このような感情があることに嫌悪感を抱きました。

また、以前のわたしは、「きこえない人＝手話」という安易な見方にも憤慨していました。きこえない人の中には手話を使わず、筆談を望む人もいれば、文章が苦手な筆談を嫌がる人もいます。「中途失聴者や片耳難聴者もいて、それぞれが育った背景も考えると、10人いれば10通りなのに」と<sup>註7)</sup>。でも、その自分が、耳のきこえる人を「きこえる人」と一括りにして見ていました。「きこえるあなたたちは、きこえないわたしたちより困っていない。だから、わたしたちは助けてもらって当たり前」だと。

「これまで『少数派』・『多数派』と分けて考えていたけれど、違うんだ。誰もが少数派となり、多数派にもなる、誰もが『当事者』ということなんだ」<sup>註8)</sup>。そのことに気づくと、「きこえる人」に対して抱いていた怒りが小さくなり、自分と同じ人間なのだと感じられるようになりました。

当事者の問題をはっきりさせるために区別することは大切ですが、それは諸刃の剣で、同時に短絡的な思考に陥ってしまう危険もあります。「きこえる人」、「きこえない人」とラベルを貼ることで、わかったつもりになり、それ以外の部分を見ようとしなくなる。そうすると、一人ひとりの顔や息づかいが、感じとれなくなってしまいます。これはドキュメンタリーを制作する立場として、大きな損失だと気づきました。

加藤さんが仮設住宅で伸びやかに人づきあいをしていたのは、『○▽さん』・『◇△さん』と、一人ひとりの顔を見ていたからなのかなと思っています。加藤さんは、仮設住宅のイベントで流しそうめんの台を作ったり、災害復興住宅の集会所の棚を作ったりと、住民からも喜ばれていました。「障害の有無に関係なく、

できる人がやる」。この考えがシンプルでいいのではないかと思うようになりました。

## 8. 再び、加藤さんのこと

映画『きこえなかったあの日』が完成し、劇場公開も一段落ついた今、改めて自分に問いました。「わたしがわかりやすい言葉でコミュニケーションを求めているのはなぜなのか？」と。もしかしたら、「わからない」という不安を排除するためではないか。「わからない」状態は心が落ち着かないので、自分なりにひとつの「答え」を出して満足し、それ以上に考えるのを止めてしまったのではないか。

振り返ってみると、加藤さんはコミュニケーションをほんとうに楽しんでいただろうか？

2016年、災害復興住宅に引っ越した加藤さんは、精神的に不安定のような様子でした。「誰かが監視している」と朝の散歩も止めてしまいました。カメラを向けられることも嫌がりました。

翌年、復興住宅の住民との交流の場である「たんぽぽの会」が発足すると、加藤さんも参加するようになりました。その会に手話のできる人はいませんでしたが、区長は「男同士だからわかる」と笑顔で話してくれました。加藤さんも区長や他の住民と輪になってマージャンなどを楽しんでいました。ただ、集会所を出ると、こわばった表情になっていたことを思い出します。「手話ができるできないに関係なく、毎日顔を合わせる関係が大切なのだ」と思っていました。本当のところはどうだったのでしょうか？

それに、加藤さんは仮設住宅でも心から楽しんでいただろうか？ カメラの前でニコニコとふるまっていただけかもしれない。このように問い出すと、わかっていたつもりのものが、どんどん崩れていってしまいます。

「加藤さんは何を思い、生きていたのだろうか」

「わからない」…

これが加藤さんに対する誠実な態度なのかもしれません。「ひとの生は、言葉で説明できるものではな

い。さまざまな環境や出来事、人間関係の中で糸を引きあっているもの。ひとつの意味づけや解釈に収まるものではない。人をなめんなよ、自分」。

そう思う一方で、でも、わたしはあの日の加藤さんの笑顔を、心からの笑顔だと信じたい自分もいます。自分勝手でしょうか？

加藤さんのことを考えると、色んな気持ちがあふれてきて、まとまりません。いや、上手にまとめちゃダメだ。また「わかったつもり」になってしまうじゃないか。では、どうしたらいいのか…。今はこのグチャグチャな気持ちを抱いて生きていこうと思っっています。そして、ずっとこの気持ちを忘れず「わかったつもり」にだけはならないように。

#### 謝辞

映画『きこえなかったあの日』は、加藤襲男さん、岡崎佐枝子さん、小泉正壽さん、菊地藤吉さん、信子さんをはじめ、多くの方々のお蔭で完成しました。この場を借りて、心から感謝申し上げます。

#### 補注

- 1) ここで、「きこえない」と平仮名の表記にしているのは、声や音が聞こえないという聴覚機能を基準にするのではなく、「きこえない人」としてのアイデンティティや意思を尊重するためです。
- 2) 「架け橋」シリーズには、以下の作品があります。『架け橋 第1弾 ～東日本大震災 宮城の被災ろう者は今～』、『架け橋 第2弾 ～東日本大震災 一ヶ月の被災ろう者～』、『架け橋 第3弾 ～地域の絆～』、『架け橋 第4弾 ～前に進む力～』。
- 3) 「助けたいという思いはろう者も同じ ～聴覚障害者団体として全国初の災害ボランティア活動～」。YahooのCREATORSというページで記事と動画を発信しています。  
<https://creators.yahoo.co.jp/imamuraayako/0200000578> (2021年11月7日最終確認)
- 4) かつて日本社会で手話が禁じられていたことは、たとえば、NHKの以下のサイトなどで詳しく知ることができます。NHK福祉情報サイト「ハートネット」『手話と口話—ろう教育130年の模索—』  
<https://www.nhk.or.jp/heart-net/program/rounan/430/> (2021年11月7日最終確認)  
この件に関しては、まだ世の中で、あまり情報が共有されていないかもしれません。多くの学校では、教師の口の動きを読み取る「口話」教育が行われていました。口の動きを読み取り、健聴者と同じように発話をする訓練が中心であったことから、手話の訓練がおろそかになり、時に禁止されたのです。口話の訓練に多くの時間がかけられたことから、勉強の進捗が遅れてしまった人も多い

といます。このような実態を記した記事としては、たとえば、朝日新聞「学校で手話禁止、見つければ罰が 手話が言語になるまで」(2019年5月19日付)などがあります。

<https://www.asahi.com/articles/ASM5W566GM5WPUZB00S.html> (2021年11月7日最終確認)

なお、全日本ろうあ連盟の「手話でGO! ～手話言語法定に向けて」というパンフレットなども参考になります。  
<https://www.jfd.or.jp/info/misc/sgh/20150717-sgh-s-huwadego.pdf> (2021年11月7日最終確認)

- 5) 鳥取県手話言語条例に関しては、こちら。  
<https://www.pref.tottori.lg.jp/222957.html> (2021年11月7日最終確認)

条例の新設理由は、次のように明示されています。「障がい者への理解と共生を県民運動として推進するあいサポート運動の発祥の地である鳥取県において、ろう者の人権が尊重され、ろう者とろう者以外の者が互いを理解し共生することができる社会を築くため、手話が言語であるとの認識に基づき、手話の普及に関し基本理念を定め、県、市町村、県民及び事業者の責務及び役割を明らかにするとともに、手話の普及のための施策の総合かつ計画的な推進を図ろうとするものである」。

- 6) 『11歳の君へ ～いろんなカタチの好き～』(2018)、『友達やめた』(2020)。
- 7) 以下の論文には、コロナ禍における聴覚障害者の困窮した実態が概括されています。そして、聴覚障害者といっても、その障害の種別や程度が多様であることが記述されています。「コロナ禍における聴覚障害者の防災意識調査—滋賀県草津市におけるアンケートから—」、近藤誠司・中野充博(2020)、社会安全学研究第11巻、pp. 109-123。
- 8) 青山ゆみこ著『ほんのちょっと当事者』(21019) ミシマ社などにも、同様の観点が述べられて参考になります。